

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

〒163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37F

Phone: 03-3344-1701(代)

Fax: 03-3342-6911

URL <http://www.toyotafound.or.jp>

No. 87

Apr. 1999

新しいアートの胎動 芸術の社会化・社会の芸術化



「エイブル・アート」プロデューサー
財団法人 たんぼぼの家 理事長
播磨 靖夫

エイブル・アート展の成功

東京の上野の森は、毎年、春ともなると名だたる美術展でにぎわう。今年の超話題はなんといってもフランスからやってきたドラクワの「民衆を導く自由の女神」だろう。さすが「自由の女神」さまだけある。自画像をあしらったチャーター機で来日されたものだから、派手好きのメディアは放っておかない。そのおかげか国立博物館は長蛇の列ができた。長い待ち時間、短い鑑賞時間にもかかわらず、大勢の人びとが押しかけた。

ちょうどそのころ、私たちは「エイブル・アート'99」を、そのとりにある東京都美術館で、2月中旬から約1ヵ月間にわたって開いていた。東京都美術館、日本障害者芸術文化協会、朝日新聞社が主催した、わが国でも最大規模の「障害者芸術」の展覧会であった。

「このアートで元気になる」というタイトルのこの展覧会では、アーティスト45人の作品450点を展示した。アサヒ・イブニング・ニュースの美術コラムで「同じときに東京で開かれた現代美術の展覧会のなかでも最も優れたものの一つ」と評価され、TBSのニュース23で「エイブル・アート」の特集が組まれるほど評判の高いものになった。

これまで「エイブル・アート」は、95年から大阪、東京で3回も展覧会を開いている。注目されるようになったのは、97年に初めて東京都美術館で開いた「魂の対話」である。これは京都の重度の知的障害者施設、みずのき寮の絵かきたちの絵画と、千葉県立千葉盲学校の子供たちの粘土造形の長年にわたる集大成を見せるものである。「エイブル・アート」を通して、美術作品との対話の楽しさ、人と人の心がつながっていくことの幸福感を感じてもらおうという企画だった。

この展覧会では、これまで概念化された美術とは、まったく逆の方向の美術といえるかもしれないもの、つまり私たちの美術の概念をはるかに超える表現を展示することができたのではないかと自負している。というのも、観賞した人たちが新鮮なショックを受け、多くの人たちが幸福な気分になったり、癒されたり、元気づけられたりしたからだ。こうしたことは現代美術がまったくフォローしなくなったことである。

現代美術とは別の美術のあり方をこの美術がめざしていること、さらには社会での美術の役割や力の見直しを提案していることが、社会的にも反響を呼び、美術の世界からも注視されるようになった。このあたりから「エイブル・アート」という言葉が、いろいろなところで使われるようになってきた。

新しい芸術の誕生

今回は東京都美術館の熱心な勧めで、前回の2倍の数の作品を展示することができた。期間も前回の2週間から5週間に大幅にふえた。何よりもうれしかったことは、入場者数が有料にもかかわらず1万7千人を超えたことである。「有料にもかかわらず」といったのは、これまで私たちが開く展覧会は無料というのが相場となっていたからだ。

上野の森のような権威づけされたところで2回も展覧会がもてたのは、私たちにとって特別の意味がある。これまで「障害者芸

術」は、長いあいだ公立の美術館のような制度化されたところから締めだされてきたからだ。それも、もう2度とやってこないだろう、あの「ドラクロワ」と並んで開けるのは記念すべきことである。

ところで、美術の世界では「エイブル・アート」は、アウトサイダー・アートに属するが、あえて新しい名付けをしたのには理由がある。現在の社会状況は、バブルが崩壊したあと無力感が漂い、オウム事件、神戸の少年事件、毒入りカレー事件など人間不信に陥ることがつづいている。これらは近代社会が人間的な要素をなおざりにしてきたことから、今日さまざまな病理現象となって現れているといえるからだ。

そこで私たちは生命を織り成す新しい芸術運動の必要性を感じ、4年前から「エイブル・アート・ムーブメント」を提唱し、新しい視座で「障害者芸術」を見直す展開をしている。そこに人間の偉大さ、素晴らしさ、楽しさを改めて問い直し、人間と人

間、人間と自然が交感する社会をつくりたい、という願いが託されている。

これはもともと社会的に価値を低められている人たちにアートを通して能力を高め、さらには社会的なイメージを高めることを目的としてはじまったものだ。このような社会的マイノリティーの文化による復権というのは、障害のある人たちにとって大きなテーマでもある。マイノリティーにたいする排除と差別は社会構造の問題であると同時に、すぐれて文化構造の問題であるからだ。それが今では「障害者芸術」に概念化されたアートとは別の美的価値を見だし、それらが人間の魂の解放にどのような影響を及ぼすかを見る新しい芸術運動に発展している。

わが国の障害者芸術の歴史

わが国の「障害者芸術」の美術の歴史を簡単に振り返っておこう。ここで断っておきたいのは、マスメディアなどによってつくられた有名な天才画家、山下清に

ついては別の評価をすべきであるということである。「和製ゴッホ」をめぐるお祭り騒ぎをよそに、「障害と芸術」のかかわりについて、真摯に取り組んだ人たちがいたことに光をあてたい。

文献資料によると、50年代に神戸市立盲学校の福来四郎さんが視覚障害をもつ子供たちに造形を指導したのがはじまりとされている。50年代から60年代にかけて前衛的な陶芸家であった八木一夫さんが、滋賀の重度障害者施設、近江学園で粘土造形の指導に取り組みはじめる。これが今日までつづいている滋賀の独特の粘土造形活動のルーツとなる。

60年代少し遅れて日本画家の西垣篤一さんが、京都の知的障害者施設、みずのき寮で絵画教室をはじめが、今やこの作品は世界的にも評価されている。70年代には陶芸家でもある西村陽平さんが、千葉県立盲学校で視覚障害をもつ子供たちの粘土造形を教える一方、コラボレーションを重視したワークショップをはじめ。さらには東京・渋谷のギャラリーTOMが企画した造形コンクールによって視覚障害者の芸術活動が高まる。80年代以降は福祉施設を中心にさまざまな創造活動が展開する。

特筆すべきは、みずのき寮の絵画のレベルの高さである。ここはもともと重度の知的障害をもつ人たちの訓練の一環として美術教育と取り組んだ。しかし、西垣さんの適切な指導、具象よりも抽象に可能性があるなど潜在能力を見抜く力、それに厳しい財源のなかの施設の支援があって美術教育の可能性が見えはじめた。

さらに芸術活動として高めるための方策を考えていたところ、80年から86年にかけてトヨタ財団から2度にわたる研究助成、さらには成果発表助成を得ること



「猫」 吉川敏明作 1981年作成 46 × 63.5 cm 木炭・紙

ができた。慢性的な財源不足に悩まされている福祉の現場では、物心にわたる支援を得てこれまでできなかった創作活動に取り組んだ。その成果が、スイスのアール・ブリュット・ミュージアムに収蔵されるなど、今日の世界的な評価につながっている。

財団・企業からの支援

「効率」を社会原理としてきた日本社会では、文化のもつポテンシャルをいかしていこうという発想はないにひとしい。福祉の現場においても「生産力」が重視され、それに役立たない芸術活動などは切り捨てられてきた。

こうした状況のもとで、みずのき寮の「重度の知的障害者の美術教育の可能性」の研究に助成するのは、トヨタ財団にとって大変な決断だったにちがいない。しかし、その助成金のほとんどが絵の具代や画材代に変わったとしても、今確実に遺産として残っているのである。ともすれば、わが国では社会的体質としてリスクなものを避ける傾向があるが、トヨタ財団の洞察力、組織の感性に敬意を払いたい。

この残された遺産は、偶然のたまものなのか。このみずのき寮の成果を奇跡にせず、普遍化していく文化戦略が必要である。これが「エイブル・アート・ムーブメント」のきっかけの一つともなった。ほんとうは「ABLE = できる」なのに、社会システムができなくさせている。このことを知ってもらうには、新しい「ムーブメント」が効果的と考えた。

このような文化戦略にたいして、さまざまな企業がメセナ活動として支援した。なかでもトヨタ自動車は企業の社会貢献活動の柱の一つと位置づけ、96年から毎

年「トヨタ・エイブル・アート・フォーラム」、ワークショップを全国各地で開いている。これまで27回を数えているが、カネだけでなくヒトもだして、「エイブル・アート」を熱い眼差しで見守っている障害をもつ人たちに応えている。ちなみに、トヨタ自動車は、わが国で初めてみずのき寮の絵画教室の存在を知らせるきっかけとなった展覧会のスポンサーでもある。

エイブル・アートを21世紀へ

「エイブル・アート」には、根元的な人間の「生/性(エロス)/聖」の表現がある。それが触れる人々を元気づけたり、癒したり、新たな気づきを与えたりする。このような「魂の芸術」ともいべきものが、わずか5年で大きなうねりとなったのは、社会に価値観の変化がおきているからである。これまでだとモノにおいて成長をとげるといえるものが、バブルの崩壊したあと、知性や感性や魂の深さにおいて成長をとげたい、というものに変化しつつある。時代によって新しいアートは発見されていると

いってもよい。

今抱えている「エイブル・アート」の課題は、みずのき寮をはじめとして全国各地にある大量の作品群をどのように整理し、展示し、保存するかということである。長年取り組んできたところほど整理や保存の状態が悪く、破損や散逸の危険が迫っている。私たちはこれらの作品群を「21世紀への人類の遺産」としてデジタル・アーカイブで残すプロジェクトをはじめようとしている。美しいものは私たちの社会感覚に由来するといわれるが、これは人間の魂の営みを記録する大プロジェクトで、社会の各方面の支援を願っている。

最後になったが、トヨタ財団の市民活動助成を得ておこなったアジア太平洋障害者芸術文化調査が、今回の展覧会をはじめ「エイブル・アート」の文化戦略のもとになっていることを報告し、この場を借りてお礼を述べたい。



「エイブルアート 99」
(東京都美術館)

1998年度市民活動助成対象が決定〔一覧表次頁〕

(「1998年度・市民活動助成の選考を終えて
～市民活動助成選考委員長 星野昌子～」
より)

市民活動助成：応募の概要と特徴

1998年度の市民活動助成については、昨年10月1日から11月30日までの公募の結果、合計263件(昨年度比80件増)の応募があった。この件数は、年1回の公募としては過去最多となる。

これについては、昨年12月1日より特定非営利活動促進法(NPO法)が施行されたことに伴い、市民活動に関わる情報が従来と比べて圧倒的に増えたこと、その一方で、昨今の財政悪化状況が大きく広がってきたこと、などが主な要因と考えられる。

応募の全体状況については、先ず主体となる応募団体の所在地域としては、東京を主とする関東圏が89件と、これまで同様最も多かったものの、相対的には減少の傾向にある。それ以外の地域は昨年

度に比べてすべて増加しているが、中でも、北海道、北陸、四国、九州の各地域においては増加率が高かった。

次に、応募テーマの傾向を見てみると、福祉(42件)、環境・エコロジー(37件)、地域・まちづくり(33件)をテーマとする計画は従来と変わらず多くを占めていたが、他方、子ども・教育(34件)が大きく増加した他、活動支援(22件)および医療・保健(15件)をテーマとする計画も増加したことが今回の特徴として挙げられる。

選考について

さて、選考についてであるが、今回からは、私をはじめ委員の多くが入れ替わり、新たな体制で臨むこととなった。昨年末から本年1月下旬にかけて委員各自による個別の評価作業が実施され、2月上旬には、その結果を踏まえた選考委員会が行われた。

応募件数からみて、当初は、相当程度評

価が分散するのではないかと危惧されたが、蓋を開けてみたところ、意外に収斂する結果となっていた。そして、委員から推薦のあったすべての計画につき、一つひとつ、全員からコメントをいただきながら慎重かつ丁寧に長時間にわたる審議を展開した。委員会では、緊急を要する計画のみならず、長期的な視点から見て取り組む意義の高い内容を重視した他、テーマや地域のバランスなどの面においても配慮し、限られた予算の中、多くの意欲的な取り組みに対して、出来るだけ応えるよう努力したつもりである。

最終的には前掲の通り、15件・2,200万円を1998年度の助成対象として採り上げた。これらの多くは、ややもすると見過ごされがちなベーシックな問題であるが、地域や生活のあり様を考えて行く上では極めて示唆的なものばかりであり、成果のインパクトを感じさせる。今後に期待したい。

東南アジア研究地域交流プログラム

1999年度応募状況

サブ・プログラム		予算	申請		助成	
			件数	金額合計	件数	金額合計
人材育成	語学研修	\$51,600 (47,500)	24 (23)	\$168,538 (144,046)	(12)	(\$69,700)
	客員教授の招聘	\$29,000 (29,000)	12 (4)	38,925 (11,200)	(4)	(11,600)
	東南アジア研究奨励	\$34,000 (34,000)	33 (18)	181,466 (121,865)	(8)	(33,300)
地域共同事業		\$190,000 (180,000)	38 (27)	951,786 (695,890)	(12)	(179,200)
合計		\$304,600 (290,500)	107 (72)	1,340,715 (973,001)	(36)	(293,800)

() は昨年度の実績

東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREP)では、1998年12月1日より99年2月28日まで公募を行い、合計107件の応募を得た。

当プログラムの公募事業としては(1)人材育成と(2)地域共同事業とがあり、国際交流基金アジアセンターと、トヨタ財団と共同で助成を行っている。

また、(1)人材育成には、語学研修、客員教授の招聘、東南アジア研究奨励の3つのサブユニットがある。

今回の応募状況を表に示す。

選考委員会は99年5月10日にマレーシアのマラッカで行なわれ、6月理事会において助成対象が決定する。

市民活動助成対象一覧

助成番号	題 目	助成金額 (円)
	代表者 所 属	
1	98-K-029 難病の子どもと家族のQOLのためのサマーキャンプ“がんばれ共和国”の実施と関連するマニュアルの制作 (東京) 小林 信秋 難病のこども支援全国ネットワーク 事務局長 51歳 ほか7名	1,500,000
2	98-K-058 「'99建築と子供たち日米セミナー」の開催 (宮城) 細田 洋子 建築と子供たちネットワーク仙台 代表 51歳 ほか11名	1,800,000
3	98-K-080 「医者にかかる10箇条」で変える！患者の意識変革調査 (大阪) 辻本 好子 ささえあい医療人権センターCOML 代表 50歳 ほか11名	1,500,000
4	98-K-090 園芸療法を活用した大気汚染公害病患者のまちづくり参加支援プロジェクト (大阪) 傘木 宏夫 (財)公害地域再生センター 研究主任 39歳 ほか7名	1,500,000
5	98-K-111 「ピア・カウンセリング(仲間相談)の普及と有効性」に関する出版 (東京) 安積 純子 CILくにたち援助為センター 代表 43歳 ほか8名	900,000
6	98-K-112 市民・NGOによるODA改革のためのネットワーク形成と政策提言活動 (京都) 神田 浩史 ODAを改革するための市民・NGO連絡協議会 事務局長 38歳 ほか11名	1,800,000
7	98-K-123 特異的酸性水地域における実態調査および鉱毒水問題の再考 (長野) 小林 紀雄 須坂水の会 代表 58歳 ほか11名	1,500,000
8	98-K-133 市民発かながわの市民活動白書「(もっと)2神奈川PART2」(仮称)の作成を通じた、地域課題・地域資源の把握・分析・政策提言 (神奈川) 緒形 昭義 まちづくり情報センター・かながわ 代表 71歳 ほか13名	2,000,000
9	98-K-151 瀬戸内海の環境保全に関する報告書の発行 (愛媛) 阿部 悦子 環瀬戸内海会議 代表 49歳 ほか14名	800,000
10	98-K-162 「新潟県の不登校の実態と展望」に関する出版 (新潟) 足立 定夫 子どもの権利条約にいがたの会 世話人代表 52歳 ほか11名	1,000,000
11	98-K-181 「食料貿易の自由化が先進国・途上国の環境・社会にもたらす影響」に関する出版 (東京) 佐久間智子 市民フォーラム2001 事務局長 32歳 ほか7名	900,000
12	98-K-198 アジアにおける持続可能で平和なエネルギーの未来・ネットワークの構築と運営 (東京) 西尾 漢 原子力資料情報室 共同代表 52歳 ほか13名	2,000,000
13	98-K-219 「気候変動と生物多様性の関連」に関する出版 (東京) 岩槻 邦男 生物多様性JAPAN 代表 64歳 ほか14名	1,300,000
14	98-K-224 阪神大震災の一次資料に関わる「まちのアーカイブ」づくり - 震災の教訓を市民自身が振り返り、後世に伝えていくための拠点として - (兵庫) 季村 範江 震災・まちのアーカイブ 代表 50歳 ほか8名	1,800,000
15	98-K-245 児童虐待防止に関するプロジェクトの実施 (宮城) 小林 純子 MIYAGI子どもネットワーク 代表 48歳 ほか12名	1,700,000
	小 計 15 件	22,000,000

1999年度 事業計画の骨子 「25周年を迎えて」

常務理事・事務局長 黒川千万喜

3月17日に第87回理事会が開催され、1998年度市民活動助成、計画助成などの対象が決定されるとともに、99年度事業計画が承認された。以下では、その中から基本方針および重点実施事項について紹介したい。

本年度の基本方針

ますます加速される社会状況の変化の中で、財団自身が進化し成長することが重要である。

その重点を次の5点とする。(1)経済・社会・文化等あらゆる分野におけるグローバル化の進行、(2)アジア諸国における経済危機、(3)環境ホルモンのような新たな人工起源の環境脅威、(4)情報システムの発展、(5)日本における市民社会の新しい展開。その過程であわせて現在のプログラムの見直し(評価)も進めたい。

また、助成事業の充実とともに財団の自主事業にもさらに積極的に取り組んでいく。そのためには財務力の強化、情報システムの充実とともに、スタッフの能力のより一層の向上が必要であり、これらのテーマにも取り組んでいきたい。

トヨタ財団は本年25周年を迎える。これをひとつの節目として、また今後の事業展開の再構築にも資することを目的として記念事業を企画・実施していきたい。

この事業は単年度に完結するのではなく、財団活動の21世紀への展望を切り開くためのプロジェクトとして位置づけ、1999年度から2001年度にかけていくつかの企画をじっくりと組み立てていきたい。

重点実施事項

前記基本方針に沿って以下のような重点実施事項を設定した。

(1) 25周年記念事業の企画

現在以下のような企画を検討中であるが、さらに新たな案も加え、実施可能性や具体化に向けての詳細を詰める。

財団関係者からの聞き取りによる「オーラル・ヒストリー」の作成

これまでの助成の成果をベースとしたシンポジウム・ワークショップなどの開催

シリア自然史博物館設立への支援(96、97、98年度計画助成で設計画策定までの段階に助成)

非営利セクター振興プロジェクトの実施

(2) 財団活動のグローバル化

財団およびNGO/NPO等の公益団体間の国際的なネットワーク化の動きが盛んに進められている。今後、日本の財団からの発信をより強化していく必要があり、特にアジア・太平洋地区に重点を置いて、各団体間の情報共有、共同プロジェクト、共同助成などに取り組んでいきたい。また、政府セクター、企業セクターとの協力についてもこれまでの実績を踏まえてさらなる展開を期したい。

(3) 東南アジア支援の充実

ユネスコ信託基金により運営されているカンボジア王立芸術大学の遺跡保存専門家トレーニング・プログラムへの補完的支援を実施していく。また、一昨年来のアジア

の社会・経済危機により深刻な状況に追い込まれている国の研究者を支援すべく、タイ、インドネシアを中心として、現在のプログラムのきめこまかい運営と見直しを進める。1997年度から実施してきている国際助成成果物の評価作業を一層進める。SEASREPに関しても、ヴェトナム、シンガポールへもネットワークを広げるなど一層の充実をはかる。

(4) 市民社会プログラムの再構築

特定非営利活動促進法(NPO法)の施行により、日本の市民活動も新しい段階に入り、組織化、専門化が最重要なテーマとなった。これに対応して、市民活動の健全な発展に向けてより踏み込んだプログラムを検討していきたい。

(5) 情報化プロジェクトの推進

昨年10月にインターネット上でホームページを立ち上げたが反応も活発である。今後、助成成果の公表のための場としても活かせるような工夫をし、一層の内容の充実をはかりたい。

(6) 財政基盤の整備・充実

低金利経済が続く中、トヨタ自動車からの新たな出捐(96、97、98年度各50億円 合計150億円)により、何とか活動を維持することができた。今後とも効率的な運営に努めるとともに、基金増実現のための一層の理解活動を実施したい。

(7) 人材の確保、育成

財団を取り巻く環境の変化に対応し、財団が進化していくためには、人材の確保、充実が必須である。多様な人材を確保していくための柔軟な人事システムを指向していきたい。

新刊紹介

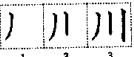
『漢英学習字典』

春遍雀来編
講談社刊

99年2.26 B5判 1060頁 ¥49,000
ISBN4-7700-2335-9
ISBN4-7700-2408-8(アジア版)

編者春遍雀来(Jack Halpern)氏が、漢字の魅力にとりつかれたのは、1968年イスラエルのキブツで日本人から、「木」から「林」や「森」が生成される仕組みを教えられたことに始まる。以来、熱心に漢字学習に取り組み、5年後に来日し、それまで苦労した経験から初心者向けの字典編纂を思い立つ。そして1990年、大変な努力により「新漢英字典」(研究社・NTC社)の出版にこぎつける。同書はすでに世界各国で高い評価を得ている。これだけでも現代の奇跡の物語といえよう。

さらに氏は同書のデータベース化とその字典の最初の一文字のサンプル

川	▶ RIVER			
	SEN kawa			
0001	川	16y6-1	S3-3-0	K3278
■1-1-2	47	A0115	06	U5DDD
				
COMPOUNDS ● [original meaning] RIVER 河川 <i>kasen</i> rivers 山川 <i>sansen</i> mountains and rivers				
KUN 【kawa 川】 ① RIVER, stream, brook ② suffix after names of (esp. Japanese) RIVERS a 川上 <i>kawakami</i> upstream, upriver 川瀬 <i>kawase</i> rapids, shallows of a river 小川 <i>ogawa</i> brook, streamlet b 江戸川 <i>edogawa</i> Edo River				
SPECIAL READINGS 川原 <i>kawara</i> dry riverbed, river beach				
HOMOPHONES kawa 河 RIVER ⇒0251				

発展的な活用に取り組む。その結果誕生したのが今回の、初級および中級学習者を対象とした「講談社漢英学習字典」である。財団はこの過程で「計算辞書学に基づく包括的日中韓漢字情報データベースシステムの構築」というテーマで助成を行った。(M.K.)

『人権条約上の国家の義務』

SHIN Hae-Bong 著
日本評論社刊

99年3.31 A5判 426頁 ¥7,600
ISBN4-535-51127-6

1976年に発効した国際人権規約は、経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約(社会権規約)と、市民的及び政治的権利に関する国際規約(自由権規約)の2つからなっている。

しかし、それらの採択の過程が2つに別れて行われただけでなく、それぞれの国家の義務も異なるかたちで規定されたという経緯も手伝い、ややもすると、社会権規約と自由権規約に対する二分論的理解がなされてきた。

本書は、締約国に人権保障の義務を課した多数国間条約(人権条約)を対象に、国家が人権保障のために条約上負う義務について、より実質的に把握することを目的としたもので、以下の全5章から構成される。

第1章「序論」 第2章「人権保障と国家の義務:理論的問題」 第3章「国家の義務をめぐる条約実行の展開」 第4章「人権保障と国家の義務:人権二分論再考」 第5章「結語」。

なお、本書のもととなった著者の博士論文「人権条約上の国家の義務 - 人権の不可分性と条約実施」の執筆に際しては、当財団より1994年度研究助成(個人研究)が行われた。著者は現在青山学院大学の助教授。(G.W.)

”Sejarah Sumatra”

William Marsden 著
Penerbit Rosda Jayaputra刊
99年 変形判 302頁
ISBN979-514-824-9

(原著:History of Sumatra,
Black Horse Court, London, 1811)

本書は、「隣人をよく知ろう」プログラムの助成を受けて、William Marsden著History of Sumatra(日本語訳「スマトラの歴史」)をインドネシア語で出版したものである。

原著は18世紀末のスマトラにおける著者の経験をもとに、スマトラ人としての存在を叙述し、一連の証明された事実を確立することを目的として1811年にイギリスで出版されたものである。

「スマトラ」という言葉は一つのエスニックグループとして考えられがちであるが、スマトラ島はインドネシアにおいて3番目に大きな島であり、多様なエスニックグループが存在する。本書は、パラエティーに富むスマトラの地理、歴史、生活、天然資源、動植物、商品作物、鉱物、言語、慣習、芸術、慣習法、儀式、伝統等を記述。そこに住むランブン、ムラユ、ミナンカバウ、パタック、アチェ、西スマトラ島嶼部、などからの様々なエスニックグループについて触れている。

本書はスマトラ研究の古典書としてだけでなく、インドネシア社会において広くスマトラについて知るうえでも有益であろう。(E.K.)



**助成財団センター
WEB サイトオープン**
URL <http://www.jfc.or.jp>

財団法人助成財団センターが4月1日より懸案のWEBサイトを立ちあげました。

「民間助成金ガイド」のメニューでは、800件以上の助成財団の概要データベースが財団名、事業内容、公募時期などから検索できます。さらにセンター会員160財団の毎年7000以上の助成対象レコードがテーマ、人名などから検索でき、そこから助成元の財団のプログラムまでたどることが出来ます。

「日本の助成財団の現状」のメニューでは、財団の設立状況、資産規模、事業内容など様々な角度からの日本の財団の最新統計が通覧できます。

「助成財団リンク集」では、現在WEBサイトを公開している約170財団のリンクが財団名50音順で表示されます。

センターWEBサイトのホームページ



このほか、「このセンターについて」でセンターの事業内容や刊行物などを紹介し、「English Information」では日本の財団の概況についての英文による解説などを収録しています。

助成対象レコードの蓄積は目下のところ3年分、約2万1千件となっています。人名で検索するとこの3年に複数の財団から助成を得ているケースなども一目でわかります。助成金を探している研究者にとって大変便利なサイトであると同時に、各財団にとっても研究者の実績や研究テーマの動向などを探る上で役に立つものといえるでしょう。

研究助成 1999 年度公募開始 締切は 5 月 20 日

この4月1日から1999年度の研究助成の公募が始まっています。例年どおり「多元価値社会の創造」を基本テーマに、文化・社会・環境・科学技術の4つのカテゴリーでテーマを募集します。

詳しくは応募要項をご参照下さい。要項・申請書をご希望の方は、和文・英文の別を明記の上、1部200円、2-3部390円の切手を同封し財団事務局までお申し込み下さい。

また今回よりトヨタ財団WEBサイト (<http://www.toyotafound.or.jp>)からも要項・申請書がダウンロード出来るようになりました。

なお、締切が例年より繰り上がって、5月20日となっていますのでご注意ください。

トヨタ財団人事

【転出】

蕎麦谷 茂(そばたに しげる)

1年9ヶ月間の出向期間を終え、4月1日付けにてトヨタ自動車へ帰任。

担当業務(総務・経理・人事)を通して、助成財団活動について幅広く体験し、また事務局運営にも大きく貢献。

伊藤 勝義(いとう かつよし)

当財団設立時から24年6ヶ月の勤務を経て、4月1日付けにて11年2ヶ月間の出向先である財団法人 助成財団センターへ転籍。

助成財団センターの設立準備段階から現在の体制整備まで多岐にわたり尽力。

【転入】

星野 末男(ほしの すえお)

トヨタ自動車より出向。4月1日付けにて総務部長に就任。

当財団設立当初10年間程、基金運用支援の経験あり。「担当業務(総務・経理・人事)を通して、助成活動の一層の活性化(働きやすい職場環境作り)に寄与したい。」が本人の抱負。

編集後記

エイブルアートを紹介いただいた播磨靖夫さんには、当財団の市民活動助成の選考委員長や市民研究コンクールの委員としても長年貢献いただきました。

ご多忙のところご寄稿ありがとうございました。



トヨタ財団レポート No.87

このレポートを継続してご希望の方、また住所等の変更がございましたらお葉書にて財団までお知らせ下さい。

発行日 1999年4月15日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 黒川千万喜
編集人 久須美雅昭
印刷 真友工芸株式会社